永富独嘯庵から小石元俊へ
――江戸時代中期の医の先哲

長与健夫

日本医史学雑誌第四十七巻第四号　平成十三年十二月二十日発行
平成十三年三月三十日受付
平成十三年九月　八日受理

〔要旨〕永富独嘯庵と小石元俊は、八代将軍徳川吉宗の治世の頃に生を享けたほぼ同時代の医師で、独嘯庵は師の山脇東洋がわが国ではじめて「腑分け」をすることによって勃興してきた蘭医学の影響をうけて人体解剖の重要性を知り、長崎通詞で医も行い蘭医書の解読にも通じていた吉雄耕牛からオランダ医学の内容の概略を聞く機会を得て、その極意を英才をもってなる小石元俊に伝えるべく入門を薦めた。独嘯庵は三十八歳の若さで死去したので、彼が直接元俊に真意を伝えることは出来なかったが、その後元俊は『解体新書』などを参考にして、自ら刑屍人を解剖して症状と臓器の変化との関連性を把握することにつとめた。このようにして独嘯庵が知り得た知識を、元俊は自ら手を下すことによって、解剖学を病理解剖学の水準に引きあげるきっかけをつくるにいたった。

キーワード――山脇東洋、吉雄耕牛、解体新書、解剖学、病理解剖学

はじめに

八代将軍徳川吉宗の蘭書輸入緩和から解読奨励政策によって江戸中期に興った蘭方のことを思いおこす時、誰でもすぐに念頭に浮かぶのは前野良沢や杉田玄白らの『解体新書』のことであろう。確かにこの書はわが国の医学史上画期的なもので、今後ともこの書の右に出るものはないであろう。しかし歴史上の出来事というものは、どの領域でもそうであろうが、ある人物が晴天の霹靂のように出現するのではなく、そこに至る時の流れや、それに影響を与える何人かの人達がいたことを歴史は物語っている。[1]-[7]

『解体新書』の刊行でいえば、その十五年ほど前に上梓された腑分けのことを記載した山脇東洋の『蔵志』があり、さらに遡ればそのような書物の刊行を可能した古医方家達の動きがあった。東洋はその序文で次のようなことを言っている。「理ハ或ヒハ転倒スベク物イヅクンゾ誣ウ（嘘をつく）ベケンヤ。理ヲ先ニシ物ヲ後ニスルトキハ、則チ上智モ失フナキコト能ハズ。物ヲ試ミ言ヲソノ上ニ載スル時ハ、庸人（凡人）モ立ツトコロアリ」と。この言葉はそれまでの五百年以上に亘り理を先にした漢方に対する痛烈な批判であり、いわば『解体新書』誕生の母胎のような役割をもつものであった。[8]

東洋の門人であった永富独嘯庵や晩年の独嘯庵に入門した小石元俊もまた、わが国の医学史上では誰でも知っているほどに有名な人ではなく、オランダ医学の発展史という面からも、とかく忘れさられ勝ちな存在であるが、前記したような意味で再想起されて然るべき人達であろうと思う。

二、永富独嘯庵の一生

儒学者勝原翠翁の三男として享保十七年（一七三二）に長門の豊浦で生れ、十二歳のおり馬関の漢方医・永富友庵の養

子となった。若いころ同郷の山県図南に儒学を学び、のち江戸に出て医学を学ぶも医師たちの医療に対する態度に失望、帰郷後父に従って大坂に移住し、宝暦元年（一七五一）十九歳のおり京都に出て山脇東洋に師事して傷寒論典拠の古医方の伝習を受け、のち東洋の息子・東門とともに吐方で有名な越前の奥村良竹のもとで修行を受けたが　あまり意を満たされず、一旦帰郷して開業後、二十九歳のおり病のため家をはなれて諸国漫遊の旅に出た。

その漫遊中、その後の彼の一生に決定的な影響を与える機会が訪れた。それは彼が郷里の赤間関に滞在中、たまたま讃岐の医師・合田求吾が長崎から帰郷の途中、赤間関に立ちよったことによる。求吾は長崎に遊学中に、大通詞で蘭書の解読に通じ、自らも医療を行っていた吉雄耕牛とその弟の大介から蘭書に書かれているオランダ医療の話を聴き、それを「紅毛医言」として書きとめたものを持っていた。彼からその話を聞いて独嘯庵は大いに感激し矢も楯もたまらず藩主の許しを得て約百日間長崎に逗留して、耕牛が蘭書から訳する解剖に関する内容を聞き、それを書きとめて赤間関に帰り、そこで『漫遊雑記』と題して和綴じの一冊としたことであった。

その中で彼は次のようなことを言っている。「紅毛ノ政、人ヲ剝グヲ禁ゼズ。故ニ病治セズシテ死セバ必ズ剝グ。是ヲ以テ諸病ノ因ルトコロ瞭然トシテ掌ヲ指スガ如シ」と。また「夫レ中華聖人ノ邦其ノ道ヲ失スルコト二千年。特ニ蛮貊（礼儀のない国）ニ於テ之ヲ得ルハ亦タ異ナラズヤ。且ツ其ノ国、政人ノ屍ヲ刳スルヲ禁ゼズ。其ノ民マタ屠腸筋絶ノ惨ヲ屑（いさぎよし）トセズ、是ヲ以テ人病ミテ死シ其ノ病源明ラカナラザレバ則チ之ヲ刳剝（解剖）シテ視、以テ後図（くふう）ヲ為ス。有志ノ士考証・玩索（昔の文献をよく調べ、その真意を探し求める）セバ志業ヲ奨助スベキモノアルナリ」とも言っている。『解体新書』が刊行された安永三年（一七七四）の十年ほど前のことである。自らを独嘯庵と号しただけあって、彼の医学・治療に対する考えは、当時の医師たちの及びもつかないほど近代的なものであった。[9]-[11]

いささか余談になるが、彼はこの『雑記』中で乳癌について「コノ病ノ治セザルコト古ヨリ然リ。而ルニ蘭書ノ中ニ言ヘルコトアリ。ソノ初発ノ梅核ノ如クナルトキ、快刀ヲ以テ之ヲ割キ、後チ金瘡ノ法ニ従ツテ治スト。余未ダコレヲ

試ミズト雖モ書ヲ以テ後人ニ告グ」と（記録には見当たらないが、華岡清洲はこの書に目を通していたに違いない）。

三、永富独嘯庵が小石元俊に宛てた手紙

宝暦十二年（一七六二）東洋の同門である淡輪元潜を通じて、英才をもってなる小石元俊から書簡を受けとった独嘯庵は、次のような手紙を元俊に送った。「向暑　華笺（手紙）ヲ賜リ多謝。惰夫（私）淡輪元潜ト交ルコト二十余年、憂ヲ与ニシ歓ヲ与ニス。而今而後足下（あなた）ト交ルコト元潜ニ於ケル如クンバ、是レ大幸ナリ。聞ク、足下能ク父ニ事エ（つかえ）母に事エ、薪水ノ労ヲ親シクシ又能ク経史ヲ読ムト。古人ニ慙（は）ジズト謂フ可シ。…嘗テ曰く、凡ソ百技之ヲ知ル者有リ、之を知ル者ハ是ヲ得ル者ニ如カズ。而シテ之ヲ知ルハ易ク、之ヲ得ルハ難シ。夫レ之ヲ得ル者ハ、順逆（順境と逆境）ノ為ニ拘ワル所勿レ、寵辱（栄華と不運）ノ為ニ移ル所勿レ、貧富ノ為ニ阻ム所トナル勿レ。而シテ後之ヲ真ニ得ルト謂フ。乃チ（すなわち）茫々タル宇宙、鮮（少い）カナ之ヲ得ルコト。足下　夫レ諸（コレ）ヲ思へ。

宝暦十二年（一七六二）

独嘯庵　頓首復ス

小石　元俊　足下

四、小石元俊の生涯

元俊は寛保三年（一七四三）小浜藩士小石李伯の子として生まれ、幼児から英才の誉れ高く、天文、地理、生物の理に疑問をいだくような思索型の少年で、陰陽五行説についても、陰陽は僅かに地球に適用されるだけで、その他には適用出来ず、五行は人身には適用出来るが天地の理は総括出来ないと言って、時の儒学に早くから批判的であった。

父は彼の性格を見ぬいて山脇東洋の門人・淡輪元潜に入門を頼んだ。元潜も一見して元俊の非凡さを知り、僅か十歳

で師の薫陶にこたえた。十七歳のとき彼は両親の介護に追われなければならぬ苦境に陥り、生活を支えるために医療を行ったりもしたが、彼の誠実な人柄によって金策の苦労も乗りきることが出来た。元潜を通じて元俊の英才を知った永富独嘯庵は、その才能を開花させる為に入門を薦める心情溢れる書簡を元俊に送った。

元俊は治療と両親の看護、介護に多忙であったので直ぐに返事を書けずにいた。その間に東洋は幕府に召され独嘯庵を同行させようと呼びよせ、彼は急いで上洛したが、大坂に来たとき東洋の急逝の報に接し、京都に至って前後処置を講じ、その後大坂に移り開業して梅毒の治療などで盛名高く吉益東洞と比肩されるに至ったが、元俊の返事を待ちきれず自ら元俊の家を訪ねて入門を勧めたので、彼もついにその好意を無にし難く入門を決意した。しかしその後間もなく独嘯庵は病を得て明和三年（一七六六）三十五歳の若さで死亡したので、彼らの師弟としての交流は短期間で終わってしまった。

独嘯庵のもとに入門したが、師が間もなく死亡し彼の父も他界したので、両者の墓碑を建て、しばらくの間西国漫遊の旅に出ている間に『解体新書』の刊行を知り、それを読んで深い感銘を受けた元俊は、天明三年（一七八三）伏見で自ら解剖を行い、「平次郎臓図」なる記録を残した。その序文には以下のような記載がある。「医ノ未ダ蔵ヲ知ラザルハ、以テ其ノ治ヲ用フベカラザル也。猶オ将ノ未ダ其ノ地利ニ達セザルガ如ク、以テ其ノ兵ヲ用フベカラザル也。然レドモ漢以来、医ノ臓ヲ言フ者率（おおむね）ネ皆コノ誤リヲ妄（みだり）ニシ、其ノ治モ亦妄ニセシムル也。是ヲ以テ近時医ノ稍々良ナル者往々多ク観臓ノ挙アリ。而シテ恨ム所ハ其ノ観率ネ詳悉スル能ハズ、ソノ図記スル所ノ書籍、之ヲ蛮人ノ咼剝スルノ書ニ比スルニ大イニ疏密アリ。則チ其ノ間顧ミテ多クノ人ヲシテ疑惑ヲ生ゼシム。此レ安（いずくん）ゾ拠ルニ足ラン。故ニ今其ノ道ニ達セント欲スル者、必ズ観臓ヲ志スト雖モ其ノ得ル者甚ダ希ナリ。蓋シ其ノ時ヲ得ルノ至難ノ故也」と。

また元俊は本邦人がなぜ蛮人の精に及ばないのかとの設問に対し、それは「俗情の差である」と次のように言ってい

る。「夫レ蛮ノ国タル、其ノ人ノ性率ネ憶度（いい加減な推測）ノ理ヲ信ゼズ、断載ノ惨ヲ屑シトセズ。異疾アル者ハ遺言シテ遺体ヲ解剖ニ供シ、人ハコレヲ罪悪視セザルノミカ、勇気アル行為トスル。医師モ病因不明ナラバ官ニ請ヒ通常許可サル。又医者ハ医学全般ニ亘ラズ専門ニ専心スル故、後人モ信用ス。解決困難ナルモノハ後世ノ有志之ヲ継グ。コレハ建国以来ノ習慣デ、解屍ノ如キモ精密ヲ加フ。トコロガ我カ国ハコレト異リ、憶度知トナシ、実験愚トナシ、高談仁トナシ、断截惨トナス。勇有リト雖モ往タ顧ミズ、之ヲ為サント欲スル者、観臓マタ官之ヲ允ス（ゆるす）コト希（まれ）ナル所、コレ本邦ノ蛮人ヨリ粗ナル理由ナリ。」と医家の言うべくして言い難い点を自信をもって喝破している。これは封建教学にたいする痛烈な批判であり、独嘯庵時代から一歩も二歩も踏みこんだより具体的な意見である。

元俊は天明六年（一七八六）江戸に出て玄白、玄沢らの教えを受け、大槻宅に寄寓するなどして半年滞在の後京に帰り、大坂との間を往来しながら『解体新書』を講じ蘭学を鼓吹した。彼自信は蘭語を解しなかったので大坂の富商で天文学者でもある間　重富と図って傘屋の職人橋本宗吉を江戸の大槻玄沢門に送り蘭語を学ばさせた。宗吉は帰坂後、元俊の指導のもとに蘭語塾「絲漢堂」を開く、元俊のためにパルフェインの解剖書の翻訳なども行った。元俊はまた京坂の間を往復しながら斉藤方策、中　天遊など多くの門人を養成し、関西の地に蘭学の種を植えつけた。[12]-[15]

五、おわりに

元俊は独嘯庵より十歳ほど若かったが、江戸時代中期に生を亨けたほぼ同時代の人である。二人に共通して云えることは、未だ漢方が支配的であった封建制の時期に、仄聞し得る舶載蘭書や長崎通詞による情報を通じて医療の将来を予測し、人体の内部の様相をより詳しく知ることの必要性を痛感したことである。

そして独嘯庵のころは蘭書の反訳でしか知ることが出来なかった知識を、元俊は自らの手で解剖を行い、内臓の知識をより正確にするとともに、その変化を疾患と結びつける努力をした。彼らのこれらの功績は目立たないながら、わが

国の医学史上では見のがすことが出来ない（それにしても元俊の畢生の書ともいうべき『元衍』が京都の大火で消失してしまったことは返すがえすも惜しまれる）。

参考文献

（1）富士川游　『日本医学史要綱』　東洋文庫　二六二、平凡社、昭和四九年
（2）小川鼎三　『医学の歴史』　中公新書、一一〇、一二九頁、昭和三十九年
（3）沼田次郎　「洋学勃興の〝思想的前提〟について」『日本歴史』　四〇三、昭和五六年
（4）藤野恒三郎　『医学史話』　菜根出版、一四〇頁、昭和五九年
（5）中野　操　『大坂蘭学史話』　思文閣出版、三五～三九頁、昭和五四年
（6）宗田　一　『図説・日本医療文化史』　思文閣出版、一八四～一八五頁、平成一年
（7）阿知波五郎　『近代日本の医学――西欧医学受容の軌跡』　思文閣出版、昭和五七年
（8）山脇東洋　『蔵志』序文、宝暦九年（一七五九）
（9）宗田　一　「永富独嘯庵著・漫遊雑記」『日本医史学雑誌』、十巻　二、三号、昭和三九年
（10）堀江健也　『永富独嘯庵の業績』　医学選粋、十七号、昭和五四年
（11）岡村芳樹　『永富独嘯庵の事績』　大坂春秋、二三巻、二号、平成六年
（12）山本四郎　『小石元俊』　七一～七四頁、八六～八七頁、人物叢書一四三、吉川弘文館、昭和四二年
（13）呉　秀三　「小石元俊先生」『中外医事新報』三一三号、明治二六年
（14）酒井シズ　『日本の医療史・小石元俊』東京書籍、二四八～二五〇頁、三〇〇～三〇一頁、昭和五七年
（15）長与健夫　「病理解剖の先覚者・小石元俊のこと」『日本医事新報』三三四一号、六二～六三頁、昭和六三年

From Dokushoan Nagatomi to Genshun Koishi

Takeo NAGAYO

In the middle part of the Edo period (around the later half of the 18th Century), several new-ideaed physicians did appear.

Among them, Dokushoan Nagatomi and Genshun Koishi were eager to learn western style autopsy. The former got the knowledge from imported Dutch books with the aid of interpreters at Nagasaki and the latter, upon influence of the former, eventually performed on autopsy by himself, aiming at understanding relationships between organ changes and the nature of the diseases of the patients.

This article describes an outline of the story of two physicians as pioneers of anatomy and pathological anatomy in this country.